

## 映画の都のまちづくり

前大阪市港湾局理事

真田 幸直

## 1 映画の都

オーギュストとルイのリュミエール兄弟が発明したシネマトグラフが、観客の前で動く映像をスクリーンに映したのは、1895年のパリのオペラ座に近いグラン・カフェの地下サロン。このときの映像は、南フランスの「ラ・シオタ駅への列車の到着」やリヨンのリュミエールが経営する「工場の出口」など、わずか1分間の実写映像だった。それでも当時の観客には、スクリーンから煙を吐いて迫ってくる列車や、仕事を終えて次々と工場から出てくる従業員の姿は、大きな驚きであった。このころ、静止画像を連続して映し、網膜の残像現象で動いているように見せる装置がいくつか発明された。なかでも撮影機と映写機を兼ねたシネマトグラフは、いまの映画のように映像をスクリーン上に映し、同時に多くの人が見ることができた



写真1 リュミエール駅の前に兄弟の大きな  
モニュメント

め、世界初の映画の一般公開と認められている（後述するエジソンのキネトスコープを、世界初とする説も一部である）。リュミエール兄弟の偉業は、リヨンの地下鉄駅名（リュミエール駅）や駅前のモニュメント、工場跡のリュミエール博物館で称えられている。（写真1）

パリ随一の奇術師で劇場を経営するジョルジュ・メリエスは、屋外の実写では気候の影響で本格的な映画を撮ることが難しいと、1897年に自宅の庭にガラス張りの映画スタジオ（幅7メートル×奥行き17メートル、当時スタジオという言葉はなく“演技のアトリエ”とか“撮影のアトリエ”と呼んだ）を作り、ストーリーのある「月世界旅行」（1902年）を製作した。これは、スタジオでトリック技法により映像を創作した世界初のSF X映画で、娯楽性を高めて商業化への道を開いた。（写真2）



写真2 カンヌのウォール・ペインティング  
に「月世界旅行」などのシーン

アメリカでは、1893年にトーマス・エジソンが、箱の中の動く映像を穴からのぞき見るキネトスコープを発明した。しかしこの装置は、一人ずつしか見ることが出来ないため、エジソンはすぐにスクリーン方式に乗り換えて、関連する特許のほとんどを確保した。独立系の映画人は、エジソン社の特許の制約が厳しいシカゴやニューヨークを逃れ、西海岸に新天地を求め、カリフォルニアの丘陵を切り開いたハリウッドの分譲地を見出した。ハリウッドは1910年に、ロサンゼルス市に編入されたが、ここには映画製作に必要な明るい太陽、広い敷地、安い労働力がそろっていた。1911年にネスター社が、ハリウッドで初の映画スタジオをサンセット大通りに面してオープンし、次いでユニバーサル、パラマウント、メトロなどが、ハリウッドとその周辺に進出した。

1916年にD. W. グリフィスは、自らの脚本と監督で、4つの異なる物語が、異なる時代と場所で同時進行（古代都市のバビロン、キリストの住むナザレ、シャルル9世下のパリ、現代のアメリカ）する長編映画「イントレランス」（Intolerance）を製作した。グリフィスは、オープンセットで巨大なバビロンの宮殿を作り、クローズアップ、ロングショット、カットバックなど新しい技法で撮影し、「動く映像の最初の芸術家であり、かつて誰も見ることでできなかった世界をスクリーン上に再現した最初の人物」と称えられている。ここから映画は、それまでの安っぽいショート・フィルムの見世物から、映像表現による新しい芸術と認められた。

映画のステイタスが高まると、豪華な「映画宮殿」と呼ばれる映画館が建てられ、専属俳優の映画スターが生まれ、さらにトーキー映画が一般化し、製作・配給・興行を一手に行う映画

会社（メジャー・スタジオ）が生まれた。1920年代には、ハリウッドの人口は10万人を越え、主要な産業が映画となり、映画会社のオフィスや映画スタジオ、映画館、百貨店、学校、俳優や監督の豪華な屋敷が集まり、華やかな「映画の都」が生まれた。この様子は、ハリウッドの豪邸に住むサイレント時代の女優が、カムバックを夢見て売れない脚本家と共同生活をおくる「サンセット大通り」（Sunset Boulevard、ビリー・ワイルダー監督、1950年）で見ることができる。

1980年代後半から、情報化やデジタル技術が著しく進み、メディアや電気メーカーなど異業種も交えた映画会社のM&Aが頻繁にあり、映画スタジオがハリウッドから郊外に移転し、海外での映画製作も増えた。



写真3 ハリウッド・ハイランドにはバビロンの門など様々な映画の仕掛け

「映画の都」の復活をめざすロサンゼルス市は、大手の商業デベロッパーと組んで、16年かけてハリウッド通りに面した一角を再開発した。

2001年に、映画館、劇場、ホテル、レストラン、ショップの複合エンターテインメントビル「ハリウッド・ハイランド」が完成し、バビロンの門がビルのデザインに蘇り、42年ぶりにアカデミー賞の授賞式がハリウッド(コダック・シアター)に戻り、観光客は「HOLLYWOOD」の看板を背に記念写真が撮れるようになった。(写真3)

## 2 住み心地よき都市

リュミエール社は、映画の普及のため世界の各都市に撮影兼映写技師を派遣して上映し、並行して新しい映像を手に入れるため、各地の風景や生活模様を撮影した。京都出身の実業家・稲畑勝太郎は、かつてリヨンの工業学校留学中にオーギュストと同級生だった縁で、1896年に渡仏してシネマトグラフやフィルム、日本の興行権を取得し、リュミエール社のコンスタン・ジレルを伴って帰国した。1897年1月に、京都電燈株式会社の中庭でシネマトグラフの試写実験を行い、2月に大阪に移って難波の南地演舞場で、千日前の興行師・奥田弁次郎の協力で、日本初の有料の映画興行を1週間行った。

染工場などを経営する稲畑は、後に映画興行の権利などを横田商会に譲って映画界から離れ、1922年に第10代の大阪商工会議所会頭に就任した(1934年まで在職)。稲畑は、シネマトグラフの取得を振り返り、「ヨーロッパの文化を日本に紹介するのは、静止写真で見せるよりも、このシネマトグラフによるのが最も適当だと思った」と述べている。東宝社長の小林一三は、南地演舞場跡地に南街会館を建てるときに、文献で映画興行のことを知り、奇しき因縁と思って、「日本に於ける映画興行の発祥の地」

と記した銘板(1953年作)を残した。(写真4)



**写真4 南街会館は2006年に建替り「東宝南街ビル」に銘板が引き継がれた**

大阪は1889年に市制を施行し、1915年に巨費を投じた大阪港築港事業が竣功し、1920年代に対中国貿易で日本一の輸出港となり、多額の貿易黒字を計上した。これを梃子に、1919年の大阪市区改正設計、1921年の第一次大阪都市計画事業、1928年の総合大阪都市計画で街路、運河、公園・緑地、下水道、土地区画整理を、また1925年に高速鉄道(地下鉄)4路線の都市計画を定め、封建時代の街並みを近代都市に改造した。このころ、大阪市助役を経て市長に就任した関一(在職期間:助役1914~1923年、市長~1935年)は、都市計画を「住み心地よき都市を建設するための骨子となるもの」(関一「住宅問題と都市計画」と考え、ゆとりある都心業務地とすぐれた住環境の郊外住宅地のある都市をめざした。御堂筋は、難波と梅田の両鉄道駅を結ぶ現道を拡幅し、かつ地下に高速鉄道



を通して郊外と結ぶ計画であった（江坂～梅田～難波～我孫子間）。この計画は、国費の投入がほとんど望めないなかで、幅3間（5.4メートル）の現道を24間（43.6メートル）と大幅に拡幅するため、多額の整備費の3分の1を受益者負担とした。多くの土地所有者は、立ち退きや費用負担を強いられ、関は市議会から「御堂筋の土を一尺掘ると、あなた自身の墓穴を一尺掘ることになる」と迫られたが、「大阪市民の生活が少しでもよくなることであれば、それが私の墓穴となっても致し方がない」と応じて事業を進め、在職のまま病没した2年後の1937年に完成した。

御堂筋の完成で、都心の交通手段が水運から陸上主体になり、意匠に優れた淀屋橋や大江橋、

4列の銀杏並木や街路灯が整備された。また沿道の建替えて、不燃化や高層化が進み防災性が高まり、壁面の統一や優れた意匠のファサードで近代都市美を作り出した。大阪ガスビル（1933年）、大丸百貨店（1922～33年）、そごう百貨店（1935年、2005年建替、現大丸百貨店）、南海ビルディング（高島屋、1930～32年）、阪急ビルディング（1929～36年、建替工事中）は、主たる用途と展示場、映画館、食堂などがある複合用途の建物で、そこでは競うように西洋の芸術、生活様式、食習慣、エレベーター・冷暖房などの先進技術を紹介した。地下鉄は、梅田と難波の間は1938年に供用したが、郊外の住宅地化をめざした延伸は遅れ、戦後の高度成長期になった（江坂までが1970年、我孫子までが1987年に供用）。（写真5、6）



写真5 もとは映画宮殿の松竹座(1923年)は  
1997年に同じファサードで建替



写真6 ブラック・レインでオートバイが疾走した  
阪急ビルは都市再生特別地区で建替工事中

大阪は、ハリウッドが「ブラック・レイン」(Black Rain、リドリー・スコット監督、1989年)で日本初の本格的なロケをした都市で、2000年には官民でロケ誘致を強化するため、フィルムコミッション「大阪ロケーション・サービス協議会」を設立した。2001年には、「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」を臨海部にオープンし、毎年約800万人が来場するハリウッド映画のテーマパークが定着した。2009年4月に、大阪大学総合学術博物館のミュージアム・セミナー「昭和12年のモダン都市へ」で、観光映画「大大阪観光」(大阪市電気局及び産業部製作、1937年)を上映し、当時のパンフレット、広告、報道写真を展示した。この映画から、関市長の時代に「モダン都市」に変貌を遂げる原動力が、御堂筋や地下鉄、大阪港、電気科学館などであったと分かる。2011年7月には、大阪のミニ・シアター「シネ・ヌーヴォ」が、「浪花の映画大特集」のテーマで「浪華悲歌(エレジー)」(溝口健二監督、1936年)から「大阪物語」(市川準監督、1999年)まで、60年余の間に製作された50本の映画を、一挙に上映した。

「わが町」(川島雄三監督、織田作之助原作、1956年)は、大正から昭和を逞しく生きぬく大阪人の物語で、御堂筋が大阪を代表する都心のビジネス街で登場する。しかし、平成になり沿道建物の1階から業務系用途が抜け、入れ替わりに小売商業が入るなど変化が起きている。御堂筋の高いステイタスを引き続き維持するには、風格ある景観を保ちつつ、時代を先取りした機能を取り入れる必要があり、過去の映像と時代背景をいま一度振り返ることで、その道筋が見えてくる。

### 3 都市味到

江戸時代の大阪は、全国各地から商人や物資が集まり、中之島を囲む川沿いに雑俵場魚市場、堂島米市場、天満青物市場があった。井原西鶴の「日本永代蔵」などをもとにした「大阪物語」(吉村公三郎監督、1957年)は、貧農から両替商に立身出世したが、最後には破滅する大阪商人が主人公で、蔵屋敷や米市場のある中之島に、大量の米俵が荷揚されるのがファースト・シーン。40年後の「大阪物語」(市川準監督、1999年)は、売れない夫婦漫才師と娘の物語だが、全編を大阪でロケをし、大阪の庶民や街並みも主役のような映画。



写真7 湊橋付近は観光船が水面を、ビルや高速道路が空を覆う

堂島川と土佐堀川が合流する中之島の西端に、4つの橋が架かっているが、その一つが湊橋。戦後間もない貧しい時代に、湊橋の下に係留された一艘の廓船に住む姉弟と、河岸のうどん屋の子供とのひと夏の出会いを、モノクロ映像で描いたのが「泥の川」(小栗康平監督、宮本輝原作、1981年)。2011年6月に、湊橋の橋詰に地元有志が、「泥の川」の文学碑を建立したが、碑文に映画の話は出てこない。湊橋付近

は既にビルが建ち、高速道路が通っており、映画は名古屋の中川運河にオープンセットを組んで撮影した。(写真7)

中川運河は、名古屋港と名古屋駅付近(笹島貨物駅)を結ぶ運河で、名古屋港への物流動線の確保と背後地の工業開発を目的として、1932年に全体が完成し「東洋一大運河」と呼ばれた。この区画整理事業を進めたのが、都市計画愛知地方委員会技師の石川栄耀で、中川運河を開削し、その掘削土を利用して兩岸の工業地を造成した。当時の法定都市計画は、このような産業開発を主眼においていたため、石川は「日本の都市計画は未だ生活のデテイルには突っ込んで居ません」と断じ、独自に都市美運動、商店街・盛り場研究、啓発や教育用の出版・映画製作などに関心を広げた。その思いは、「手段としては区画整理。精神としては小都市主義。態度としては都市味到。」(都市創作宣言、1929年)で、都市を十分に味わい良く知ることを旨としていた。

名古屋で最初にシネマトグラフが公開されたのは、1897年4月の中区桶屋町の新守座。京都では、大阪に先立つ1897年1月にシネマトグラフの試写実験が、神戸では1896年11月に下山手の神港倶楽部でキネトスコープが公開されており、西日本の主要都市にほぼ同時期に映画が紹介された。この後、常設の映画館が道頓堀、新京極、新開地、大須などの「盛り場」に開業し、撮影所は広い敷地が確保しやすい郊外にできた。しかし、当時の低い技術水準による失火、有名俳優や監督による独立プロの設立、多額の設備投資と映画ビジネスの不安定、関東大震災による東京の撮影所の被災、などが契機となり、撮影所の再編、統廃合がしばしばあり、その痕跡をいまの都市内に見つけるのは難しい。

京都では、稲畑から映画の権利を譲り受けた横田商會が、1910年に京都初の二条城撮影所を開設し、映画監督兼プロデューサーの牧野省三とスーパースターの尾上松之助のコンビが、「忠臣蔵」を手始めに数々の映画を製作した。映画の黄金時代の1950年代には、太秦にある多くの撮影所が、近くの大覚寺、天竜寺や桂川などで、盛んに時代劇映画のロケをした。しかし、テレビの普及や娯楽の多様化で映画の製作本数が減り、撮影所はテレビドラマの製作や貸しスタジオへ移行し、さらに多くは閉鎖を余儀なくされ、松竹京都映画撮影所と東映京都撮影所が残るのみとなった。

東映は、1975年に撮影所の一角を東映太秦映画村として一般に開放し、時代劇のオープンセットを利用した、映画やテレビドラマの製作の様子を公開している。かつて時代劇の衣装を着た役者が闊歩した通りは、1971年に大映通商店街と名を改めて撮影所とともに歩んできたが、1986年に大映京都撮影所が閉鎖されたため、商店街が独自にその記憶の継承に努めている。ここに事務所をおくNPO「京都の文化を映像で記録する会」は、2011年7月に牧野省三の像、尾上松之助の墓所、多作のシナリオ作家かつ監督の伊藤大輔の「熱眼熱手」の碑などを巡り、活動弁士付き無声映画「臉の母」(稲垣浩監督、1931年)を見る「太秦キネマ散歩」を主催した。日本政府は「クール・ジャパン」の一環で、アニメの海外進出を支援しているが、そのキャラクターの多くはメイド・イン・ジャパンと気づかせない。時代劇は、日本の伝統や文化の中から生まれ、様式美に満ちており、時代劇もあわせて海外マーケットをつかんでこそ、日本のソフトパワーが高まる。(写真8)



**写真8** かつて撮影所があった等持院の牧野省三の像の前の太秦キネマ散歩の一行

神戸は、阪神淡路大震災で落ち込んだ観光客をフィルム・ツーリズムで回復するため、2000年に神戸フィルムオフィスを設立し、「GO」（行定勲監督、2001年）で日本初の地下鉄線路内のロケを可能にし、フィルムオフィスの実力を発揮した。京阪神の3都市は、ともに日本の「映画発祥の地」を名乗り、ハリウッド映画のテーマパーク、時代劇映画製作の継承、強力なフィルムコミッションと、特色ある取り組みを進めてきた。最近では、ベストセラー小説を映画化した、「鴨川ホルモー」（本木克英監督、万城目学原作、2009年）、「プリンセス・トヨトミ」（鈴木雅之監督、万城目学原作、2011年）、「阪急電車」（三宅喜重監督、有川浩原作、2011年）で、小説の舞台の京都、大阪、神戸及び阪神間のまち全体がロケ地になった。映画では、フィルムコミッションが協力し、多数の市民がエキストラやボランティアで参加し、市民がわが町を味わい、良く知る絶好の機会となった。（写真9）



**写真9** 今津線・小林駅には「阪急電車」の「討ち入りは成功したの」の台詞の余韻が残る

#### 4 都市百年の大計

1933年に都市計画東京地方委員会に転じた石川は、当時の満州に長期出張して、大連駅前に劇場、茶荘、市場などが複合した連鎖街を見て、このような「盛り場」が都市に必要なと思いつからスケッチを残した。大連では、1920年代に大連駅の移転新築と駅前の商店街が計画され、1930年に通称「連鎖街」が先行して完成し、1937年には大連駅も完成した。連鎖街は、1階が店舗、2・3階が住宅の建物が、大小の道路に面して鎖のように連なり、中には映画館の「常盤座」もあった。1906年に南満州鉄道総裁に就任した後藤新平は、大連に新進の技術者を集めて帝政ロシアの計画を発展させ、近代都市を建設した。大連は、中心部に放射環状の道路網とアカシア、ポプラ、ヤナギの並木、ラウンド・アバウトの周りに洋風のホテル、銀行、役所などの建物、周辺部に大規模公園や住宅地、郊外の星ヶ浦に別荘や海水浴場があり、「北海の真珠」といわれた。（写真10）





**写真10 直径200メートルの中山広場の  
周りに昔と今の建物が並ぶ**

いまの大連は、中国の東北3省の玄関口で化学や機械工業、ソフトウェア、ファッション産業などが集積し、新しい建物も増えているが、一方で戦前の建物、広場、トラムも現役でいる。半世紀ぶりに訪れた大連で、これら昔の建物や風景から記憶を蘇らせるのが、長編のドキュメンタリー映画「遙かなるふるさと旅順・大連」（羽田澄子演出、2011年）。この映画で、かつての都市計画が、100年後に成長する大連を支えているのが分かる。1920年に東京市長となった後藤は、1922年にニューヨーク市政調査会をモデルに、東京市政調査会を設立して会長となった。その設立趣意書に、国家の中枢神経は都市に存し、都市の盛衰興亡は国家の盛衰興亡となるが、日本の都市は「当面の細務に齟齬として都市百年の大計を閑却する」ものがあると記し、この弊害を取り除く科学的調査と、長期的な視野に立った都市行政、都市計画を強調した。

中国共産党は、2011年10月の6中全会で、映画や芸術など文化活動を通じて中国のイメージを高めることを確認した。すでに中国映画100周年の2005年には、北京市郊外に巨大な「中国電影博物館」をオープンし、中国映画の誕生から発展までの歴史的資料や撮影機材、セ

ット、特撮技術を展示し、併設した映画館で新旧の映画を上映している。建国60周年の2009年には、博物館で中国を代表する撮影所の北京、上海、長春電影制片廠及び中国人民解放軍の八一電影制片廠がこれまでに製作した作品のポスター、スチール写真などを特別展示した。また、世界で活躍する中国や香港の俳優を集めて「建国大業」（The Founding of a Republic、半三平監督）や、歴史劇の「孔子の教え」（Confucius、胡玫監督）の大作を送り出し、国策としてソフトパワーを強化している。（写真11）



**写真11 中国電影博物館にはIMAX・デジタ・35ミリ  
対応の映画館もある**

台湾総督府民生局長時代の後藤は、1899年から大型船舶に対応した基隆港の改修、台北城の城壁跡の幹線街路、上下水道などのインフラ整備を進めた。官吏の娯楽の場の淡水館では、芝居、浄瑠璃、義太夫などが演じられたが、台湾で最初のリュミエール映画も1900年にここで上映された。このときの映画は、引き続き城壁の西門付近の「盛り場」で上映され、この地区がいまも賑わう映画の街の西門町になった。

台湾映画は戦後長らく低迷していたが、1980年代に民主化が進み、斬新なテーマをリアルに描く台湾ニューシネマの監督が台頭した。基隆



港を眼下に望む急斜面に、この100年余で2度にわたり注目をあびた九份がある。最初は、1890年に基隆河の鉄道橋工事で金鉱が発見され、ゴールドラッシュに沸いて「小香港」と呼ばれたが、1971年に金脈が尽き閉山になると急速に忘れられた。この浮き沈みは、現地の鉱道跡や資料館を辿り、当時の鉱夫にインタビューしたドキュメンタリー映画「風を聴く〜台湾・九份物語」(林雅行監督、2007年)で、つぶさに知ることができる。(写真12)



**写真12 九份の斜面に並ぶ茶館は「千と千尋の神隠し」のモデルだったとの説も**

次に、この九份や基隆が舞台の映画「悲情城市」(A City of Sadness、侯孝賢監督、1989年)が公開され、ヴェネチア映画祭でグランプリ(金獅子賞)を獲得し、内外から多くの観光客が訪れるようになった。この映画は、1947年の2・28事件で基隆に住む一族が離散する様子を、複数の言葉(台湾、北京、上海、広東、日本語)と哀調を帯びた音楽で描き、多くの

人々の記憶をタブーから解き放った。2000年には、台北に住む3世代一家の暮らしから生きるこの意味を問う「ヤンヤン夏の思い出」(Yi Yi:A one and a two、楊徳昌監督)で、カンヌ映画祭監督賞を獲得しており、台湾は映画表現の自由化でソフトパワーを発揮している。

## 5 都市は宮殿

20世紀初頭から100年余りで、道路、橋梁、地下鉄、下水道など強固な都市インフラを築いたニューヨーク。1930年代から40年間も市のマスター・ビルダーで、「過密な大都市圏では、牛刀を使ってでも道を切り開く」必要があると、豪腕で通したロバート・モーゼス。在野の都市計画家かつ市民活動家で、「まちに固有の近隣住区は、ドラフターからは決して生まれない」と、モーゼスに立ちはだかかったジェイン・ジェイコブズ。両者の戦いの舞台は、ワシントン広場を分断する5番街南伸計画、ウエスト・ビレッジの不良建物のクリアランス計画、ソーホー地区を通りマンハッタンを横断する10車線の高架高速道路計画。この戦いは、ジェイコブズが巧みに地元住民、政治家、マスコミや歴史地区保存運動家を巻き込み、いずれの計画も中止に追い込み、その後の都市計画に大変革をもたらした。モーゼスはその豪腕から、信仰の厚い少年ダビデ(David)に襲いかかる暴虐な巨人のゴリアテ(Goliath)のように言われたが、在職中に連邦や州政府の補助金を引き出し、13の橋梁、2つのトンネル、637マイルの高速道路、300エーカーの土地のクリアランスと28,400戸の住宅供給、リンカーンセンターやセントラルパーク動物園の建設などの業績を残した。(写真13)



**写真13 ワシントン広場の大統領就任100周年  
記念のアーチの奥が行き止まりの  
5番街**

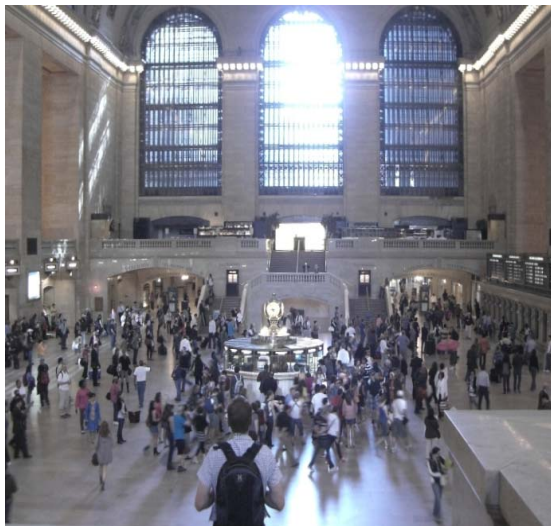
ニューヨーク市は、1975年に金融機関に市債の引き受けを拒否され、財政危機が顕在化した。直接的な原因は、石油ショックによる景気悪化だが、それまでの企業や工場の撤退による税収減、教育や福祉費の増大、公共投資やその管理費の増大、さらに過大な職員費など放漫な財政運営が、市債の信用力を低下させた。アメリカを代表する大都市の財政破綻を回避するため、連邦政府や州政府の監督を受けて、市は財政規律の回復と行財政改革に取り組んだ。州政府は1975年に、ニューヨーク市のイメージアップと、知名度の低い他の都市の観光アピールを兼ね、「I Love NY」のロゴマークや州歌を制定し、テレビコマーシャルを大々的に活用したキャンペーンをスタートした。市はすでに1966年に、市長室に映画演劇放送オフィス（MOFTB: Mayor's Office of Film, Theater & Broadcasting）を設置し、映画やテレビの撮影

に必要な、市所有の公共建物や道路の使用許可の手続きを一元化した。また、警察や消防の協力体制、売上税免除などのインセンティブ、市の広報媒体でのPRなど、映画支援策を充実してきた。

ニューヨークは、いまでは年間200本を越える映画のロケがあり、直接的な経済効果に加えて、雇用や観光客の拡大に寄与している。モーゼスが作ったリンカーンセンターは、「月の輝く夜に」（Moonstruck、ノーマン・ジェイソン監督、1987年）に、ジェイコブズが守ったワシントン広場は、「恋人たちの予感」（When Harry met Sally、ロブ・ライナー監督、1989年）に登場する。1963年に解体されたペンシルヴェニア駅は、地下駅とマディソン・スクエア・ガーデンの合築姿で、「星の王子ニューヨークへいく」（Coming to America、ジョン・ランディス監督、1988年）に登場し、「歴史的環境保全条例」（Landmarks Law、1965年）で守られたグランド・セントラル駅は、「恋におちて」（Falling in love、ウール・グロスバード監督、1984年）で運命の出会いを演出した。（写真14）

1980年代に、サービス業や不動産、保険、金融業の活況で市内総雇用者数が増加に転じると、マンハッタンのビジネスマンやワーキング・ガールが主役の、ロマンチック・コメディが盛んに撮られた。これら映画では、美術館・博物館・図書館、鉄道駅舎、大小の公園や広場、ウォーターフロント、地下鉄、フェリー、ロープウェイ、ヘリポートなどの公共建物や交通機関、アール・デコの摩天楼、格式あるホテルやデパート、しゃれたレストランやカフェ、トレンドを生むファッションなど、ありとあらゆるものが恋の物語を生み、育てる名プロデューサーになる。1957年の「めぐり逢い」（An affair to remember、レオ・マッケリー監督）で、男女が約束したエ

ンパイア・ステートビル展望台は、1993年の「めぐり逢えたら」(Sleepless in Seattle、ノーラ・エフロン監督)でも繰り返され、世代を越えて映画とロケ地のファンを繋ぎとめている。



**写真14 建物もコンコースも絵になるグランド・セントラル駅は条例と容積移転(TDR)で保存された**

エドワード・コッチ市長時代の助役が原案を書き、デイビッド・ディンキンスやルドルフ・ジュリアーニなど歴代市長に取材したのが「訣別の街」(City Hall、ハロルド・ベッカー監督、1996年)。アル・パチーノ演じる市長は、ブルックリンで凶弾に倒れた少年の葬儀で、市民が力を合わせ人が住むのにふさわしい「都市という名の宮殿」にすると宣言する。実際に歴代の市長は、行財政改革を継続し、かつて警察力による治安の向上、NPO主導のビジネス街や商業地の環境改善(BID)、税制などを用いた企業の流出防止と誘致強化に取り組み、荒廃した犯罪多発都市から内外の観光客が集まる観光都市、洗練されたサービスや金融の世界都市にイメージを転換した。しかしこのイメージは、市の人口の20%程度(面積の8%程度)のマンハッタン(とくにミッドタウンやウォール街)で、ブル

ックリン、クイーンズ、ブロンクス、スタテンアイランドのイメージではない。これら4区で、健全な中産階級が生まれ育つ近隣住区のまちづくりを進め、そのプロセスの映画化でイメージアップすれば、これまでの不幸な都市計画の対立が緩和し、バランスの取れた「人が住むのにふさわしい宮殿」に近づく。(写真15)



**写真15 クイーンズ区の映像博物館には多くの子供が校外学習に訪れる**

## 6 永遠の都

第二次世界大戦で疲弊した故郷を勇気づけるため、アイルランド系の監督や俳優が、アイルランドの村でロケをしたのが「静かなる男」(The Quiet Man、ジョン・フォード監督、1952年)。アメリカから里帰りした主人公のアイルランド人気質が、この映画の随所に現れ、エキストラで参加した村人の誇りとなった。1950年代のハリウッドは、反トラスト法でメジャー・スタジオの独占体制がくずれ、下院の非米活動委員会の審問で有能な映画人が去り、テレビの普及で映画の地位が低下した。このためメジャー・スタジオは、テレビと差別化したワイドスクリーンの採用や、新たな映像を求めて海外ロケに出た。ナポリの「旅愁」(September



Affair、ウィリアム・ディターレ監督、1950年)、ベニスの「旅情」(Summertime、デヴィッド・リーン監督、1955年)、香港の「慕情」(Love is A Many-Splendored Thing、ヘンリー・キング監督、1955年)は、美しい景色が映えるカラー映像、魅惑的な映画音楽、心ときめくラブ・ストーリーが大衆の心を捉え、海外にもマーケットを広げた。

2000年前の古代都市から、キリスト教都市、ルネサンス都市、そして現代都市と、あらゆる時代の都市計画を見ることができる「永遠の都」ローマ。1960年代には、「ローマを知るには一生では足りない」(Roma non basta una vita)との言葉が生まれたが、映画はそれを助けてくれる。「ローマの休日」(Roman Holiday、ウィリアム・ワイラー監督、1953年)では、紀元前のフォロ・ロマーナやパンテオン、8世紀のサンタ・マリア・イン・コスメディアン教会(真実の口)、15世紀のサンタンジェロ城、18世紀のトレヴィの泉、20世紀のヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂などがモノクロ映像に出てくる。貴族の館であったバルベリーニ宮殿(現国立絵画館)、ブランカッチョ宮殿(現国立東洋博物館)、コロナ宮殿(現コロナ美術館)は、それぞれ大使館の玄関、晚餐会場、ラストシーンの記者会見場で登場し、豪華な外観と贅を尽くした内装が映画を盛り上げる。「フェリーニのローマ」(Roma、フェデリコ・フェリーニ監督、1972年)では、サン・セバスティアノー門あたりを掘り進む地下鉄工事が、古代屋敷の地下室に描かれたフレスコ画をこわすシーンがあるが、これで人口が270万人のローマに、地下鉄がわずか2路線、38キロメートルしかないのが納得できる。(写真16)



**写真16 古代ローマの中枢のフォロ・ロマーナには道路や下水道が整備されていた**

1980年に完成した地下鉄A線のチネチッタ駅前にあるのが、「映画の都」という名の映画スタジオ「チネチッタ」(CINECITTA)。国家統領のベニート・ムッソリーニの指示で1937年に完成し、「映画は最強の武器なり」と歴史劇やプロパガンダ映画を製作した。戦後しばらくは避難民の仮住居になったが、この間にロベルト・ロッセリーニ監督が、戦災跡の残るローマ市街を実写で撮った「無防備都市」(Roma, citta aperta、1945年)を公開し、ネオ・レアリズモ(新しいリアリズム)の映画として、世界の映画人に衝撃を与えた。1950年代から70年代にかけて、フェリーニ監督が「私の心の家」と呼ぶ第5スタジオで幻想的な映画を、ルキノ・ビスコンティ監督が耽美的な映画を、そして娯楽を徹底したマカロニ・ウエスタンを送り出し、チネチッタは黄金時代をむかえた。この名声に惹かれて、ハリウッドの映画人が「ローマの休日」や「ベン・ハー」(Ben Hur、ウィリアム・ワイラー監督、1959年)を撮った。

チネチッタには、イタリア芸術の伝統をくむ職人の知恵と技があり、「ギャング・オブ・ニューヨーク」(Gangs of New York、マーティン・

スコセッシ監督、2002年)では、19世紀のマンハッタン(イタリア人移民街のファイブ・ポイント)のオープンセットで、CG映像では出せない本物の質感や立体感のある映像を作り出した。チネチッタは、これまでに3000本を超える映画のさまざまなシーンを撮り、台本をフィルムに写し撮る「夢の工場」と呼ばれている。1997年の民営化で、テレビドラマ、コマーシャル、ミュージックビデオなど多角化を進め、2011年のイタリア統一150周年には、期間限定で初めて一般に公開した。広い敷地(40ヘクタール)には、かつて映画で使われた古代ローマ人の彫刻が列をなすエントランス広場、数々の名作を生んだ映画スタジオ、古代ローマや19世紀のマンハッタンの巨大なオープンセット、大道具・小道具や衣装の美術工房、現像・編集・試写室や国立映画学校があり、将来は映画博物館を作る構想もある。(写真17)



**写真17 チネチッタの職人技で古代ローマの巨大な神殿がセットで蘇る**

古代ローマは、テヴェレ川の東のフォロ・ロマーナを囲むパラティーノの丘、カンピドリオの丘など7つの丘を起源とするが、ここは面的に保存される地区になっている。イタリアは、

ファシズム政権下の1942年に近代都市計画法を制定したが、戦争の混乱で実効性に乏しく、「橋渡し法」(1967年)、「ブカロッシ法」(1977年)、「ガラッソ法」(1985年、いずれも通称)で補強してきた。その特徴は、「ゾーンごとの建築規制」、「歴史的都心部の面的保存」、「住民生活を維持・改善する社会的保存」にある。また、郊外部の開発も抑制することで都心部の空間の価値を高め、保存・修復型の投資を呼び込み、観光施設の整備や都心居住の促進に役立っている。

都心を離れた北部の音楽公園に、2002年に巨大なオーディトリウム(レンゾ・ピアノ設計)が、また隣接して2010年にMAXXI(国立21世紀美術館、ザハ・ハディド設計)が完成した。2006年にはローマ市長の発案で、オーディトリウムを主会場にローマ国際映画祭がスタートした。この映画祭は、都心部の観光施設や映画館も使い、観光客や市民、子供も参加しており、先行するヴェネチア映画祭との差別化を図っている。一方、1932年スタートしたヴェネチア映画祭は、リド島の高級ホテルやビーチを会場とし、世界三大映画祭の一つで、高いステイタスを保っている。(写真18、19)



**写真18 野外劇場広場を囲む3つのホールのオーディトリウムに「映画の都」の期待**



**写真 19 ヴェネチア映画祭はリド島の高級  
ホテルや前のビーチが会場**

20世紀は「映画の世紀」で、わずか1分間の実写映像が、音声や色彩の獲得、画面の大型化、特殊撮影などで表現力を豊かにし、大衆娯楽、芸術、記録・報道、プロパガンダ、ソフトパワー、さらには都市の誕生や都市型産業へと領域を広げてきた。近年の科学技術の進歩は、オフィスでヴァーチャルな映像や3次元映像が創作でき、広い映画スタジオの維持を難しくした。世界の「映画の都」は、その名声を保つために、フィルムコミッション、ロケ地観光、映画のテーマパーク、映画博物館、映画祭、都市再開発など、新たな取り組みを進めてきた。21世紀の「映画の都」は、そこに住む人々に豊富な物語があり、かつデジタル時代のクリエイターの創造力を掻き立てる街並みのあるところで、それはローマ。「ローマは幻想の都だ。教会や政府、映画すべてが幻想を生み出す。」（「フェリーニのローマ」）。（写真20）



**写真 20 フェリーニ監督や「ローマの恋人」の  
新聞記者が住んだマルグッタ通は  
都心の住宅街**

[参考文献]

- ・ マドレーヌ・マルチット=メリエス、古賀太訳：「魔術師メリエス」(MELIES L' ENCHANTEUR)、フィルムアート社、1994年4月
- ・ ロバート・スクラー、鈴木主税訳：「アメリカ映画の文化史」(Movie-Made America: A social History of America Movies)、(株)講談社、1995年11月
- ・ 海野弘：「ハリウッド幻影工場～スキャンダルと伝説のメッカ」、(株)グリーンアロー出版社、2000年4月
- ・ 岡田清治：「リヨンに見た虹～稲畑勝太郎評伝」、日刊工業新聞社、1997年5月
- ・ 芝村篤樹：「都市の近代・大阪の20世紀」、(株)思文閣、1999年9月
- ・ 毎日新聞、関西経済百年視、2000年12月20日
- ・ 小栗康平：「NHK 人間講座 映画を見る眼」、日本放送出版協会、2003年6月
- ・ 中島直人・西成典久・初田香成・佐野浩祥・津々見崇：「都市計画家 石川栄耀～都市探求の軌跡」、鹿島出版会、2009年3月
- ・ 中島直人：「石川栄耀の都市美運動に関する研究」、



第 37 回日本都市計画学会学術研究論文集、(社)

日本都市計画学会、2002 年 11 月

- ・ 西澤泰彦：「図説 大連都市物語」、河出書房新社、1999 年 8 月
- ・ 北岡伸一：「後藤新平」、中央公論新社、1988 年 6 月
- ・ 郷仙太郎：「小説後藤新平～行革と都市政策の先駆者」、(株)学陽書房、1999 年 8 月
- ・ 田村志津子：「はじめに映画があった～植民地台湾と日本」、中央公論社、2000 年 7 月
- ・ アンソニー・フリント、渡邊泰彦訳：「ジェイコブズ対モーゼス」(WRESTING WITH MOSES)、鹿島出版会、2011 年 4 月
- ・ Dwight Garner：「When David Fought Goliath in Washington Square Park」、The New York Times、Aug. 5 2009
- ・ 東京都知事本部：「ジュリアーニ市政下のニューヨーク」、2001 年 7 月
- ・ 横田茂：「巨大都市の危機と再生～ニューヨーク市財政の軌跡」、(株)有斐閣、2008 年 6 月
- ・ 大木正明：「元気の出るニューヨーク映画講義」、(有)海鳥社、2006 年 4 月
- ・ 岡本裕豪・頼あゆみ・柴田翼：「EU における都市政策の方向とイタリア・ドイツにおける都市政策の展開」、国土交通政策研究第 16 号、国土交通省交通政策研究所、2002 年 12 月